

## 言心先生の中国便り

## チベット人の信仰

北京のある旅行ガイドが、初めてチベット人の旅行団体の仕事を受け入れることになった。彼のチベット人に対する先入観は、野蛮、不衛生、現代的なルールを知らないというものであり、非常に不安に感じていた。

想像の通り、この旅行団体のチベット人はみな皮膚が黒く、きれいな服を着ておらず、二つのスーツケースも持たない現代社会には程遠い存在で、彼の心配は一層重く募った。

さらに悪いことに、彼のホテルの予約にミスがあったため、別のホテルに変更することとなった。チベットの観光客たちはやっとホテルに着き、荷物を整理している最中、今度は突然最初のホテルから、実際には予約は済んで

おり、キャンセルもできないという電話が来た。仕方なく、彼はチベット人たちに謝り最初のホテルに戻った。

北京駅に着いたのは昼12時であったが、最終的にホテルに到着したのは午後5時であった。彼の十数年間のガイド経験で、漢民族の旅行団体に対して同じミスをした時には、全員が彼を取り囲み、金銭的な賠償を要求したり、罵ったり、殴りかかるともしばしばあった。しかし、今回、「野蛮人」と思っていたチベット人たちは一つの文句も言わず、ガイドの謝りに対して恥ずかしげな顔をして、一つしか知らない北京語「謝謝」（ありがとう）と返事をした。

次の日からガイドは彼らを北京の故宫等の数か所の観光地に連れて行った。彼にとってチベット人との数日は驚きの連続であった。例えば、彼らは漢民族の旅行者と正反対に、いつも列に並

び、観光地のルールをきちんと守っていた。また、彼らは時間も厳守し、旅行バスの良い座席を老人達に譲っていた。

数日間の旅行が終わって別れるときに、チベット人たちはガイドに白いハタを贈った。ガイドは不安から解放され、感動の涙を流した。彼は、もし自分の客が毎度今回のようなチベット人たちで

あったなら、自分の仕事がどれほど楽か、自分は何れほど幸せかと嘆いた。

このガイドは体験を記した文書の最後に「チベット人は仏教を深く信じているから、些細な物事が気にならない。一方、漢民族の大部分の人は信仰心がないため、目の前の些細な物事に夢中になっている」と分析した。

